

# まちのお寺の学校

松村 和順

▼下

「菩薩づくりで、まちづくり。それが、私の僧侶としてのテーマです」

そう語るのは、千葉県勝浦市にある妙海寺の住職・佐々木教道さん(三七)です。ここで言う菩薩とは、自分の幸せと他者の幸せを重ね合わせて考えられる人のこと。佐々木さんは、そうした菩薩の生き方を実践する人を増やすことが、僧侶の一番の仕事だと信じています。

「寺子屋ブツダ」の設立当初からのメンバーでもある佐々木さんは、二〇一三年十二月、妙海寺で「勝浦ミラクル人会議」を開催しました。ミラクル人とは、ミライをつくる人。佐々木さんにとっては、菩薩のイメージです。主要産業である漁業の低迷に加え、人口減少、少子高齢化に直面している勝浦に元気をもたらすアイデアをまちのみんなで出し合おうというのがミラクル人会議の開催趣旨です。

当し、まちづくり活動の専門家の招聘やワークショップの設計をさせていただきました。

当日は、佐々木住職の呼びかけに呼応した二十代から八十代までの、漁師・鮮魚商・料理人・学生・会社員・僧侶・お寺の役員・主婦・元教員・観光業・小売業・市議員などなど、お

## 菩薩づくりで、まちづくり

# 一人一人を活かす

最優先の思考回路がなりを潜め、「おかげさま」「ありがとう」「お先にどうぞ」というような利他的な思考回路が活性化する場合でしょう。みんなの故郷・勝浦をどうしたら良くしていけるのか? 俯瞰した視点で楽しみながら議論することができました。妙海寺の檀家総代さん

檀家さんも、そうでない方も、この会の趣旨に賛同した方々七十人ほどが妙海寺の客殿いっばいに集まってきました。世代や職業を超えたお寺ならではの顔ぶれです。

当然ながら、まちの中には、利害の対立も存在しています。一歩間違えば、未来を語ることで、対立を深めてしまうこともあるでしょう。しかし、お寺というのは不思議な場所で、自分

(八十代)からは「若い人たちと地域の未来について議論を交わらせて本当に楽しかった。ご先祖様たちも喜んでるよ」という声が聞かれました。

普通であれば、これで、「良かった。良かった」と終わるところですが、佐々木さんはここからの馬力が違います。ミラクル人会議で出たアイデアの断片を組み合わせ、妙海寺を舞台に新たな雇用を創出するプロ

「まちのお寺の学校」事務局は、イベント企画を担

「良かった。良かった」と終わるところですが、佐々木さんはここからの馬力が違います。ミラクル人会議で出たアイデアの断片を組み合わせ、妙海寺を舞台に新たな雇用を創出するプロ

地域をより良くしたいと思うチーム妙海寺の面々です。

調理師免許を持つメンバーの一人、庄司とみ子さん(六十代女性)は、夫に先立たれ、なんとなく日々の生活に張り合いを感じなくなっていた時、佐々木住職から地域のために料理の腕前を提供してもらえないかと相談があったそうです。「ご住職からやりがいをもらったら、目の前の風景が

シエクトをスタートさせます。目をつけたのは、船上で捨てられているシイラという魚です。シイラは、ハワイではマヒマヒとも呼ばれる高級魚。高タンパク低カロリーの美味しい魚なのですが、千葉では伝統的に食す習慣がなく流通していませんでした。

その捨てるはずのシイラを、お檀家さんの漁師の方から格安で譲り受け、お寺の厨房で商品開発を行いました。それを担ったのは、前より明るく感じるようになったんです」と、庄司さんは教えてくれました。さらに、この活動が地域に認められて、佐々木住職は地域活性事業に取り組みON E勝浦企業組合の水産事業部長に就任。勝浦産のシイラを「勝浦マヒマヒ」と名付け、新たな名物にするべく挑戦を始めます。一五年十月には勝浦の学校給食に採用されるという快挙も成し遂げました。

「毛利」父の讐(なぐさ)は、仮(かり)も、山口(やまぐち)する覚悟(さくご)同じ決心(ごんごん)

大講堂。演題〈20日〉「夫れ佛法遙かに非ず」、講師：福田亮成・川崎大師教学研究所以長、〈21日〉「『今を生きる』

### 短 信

●●● 短 信 ●●●  
●●● 築地本願寺・仏教文化講